

こんな日本であってほしい

社会科学研究所留学生 張 建 耀

您好！今日は！

日本に留学に来て、3年余になりました。よほどの意外がない限り、今後の約3年間も日本に居続けることになろうと思います。正直のところを言うと、これまでは楽しい思い出ばかりではなかった。それにしても、いつかから日本、とりわけ広島は第2の故郷のように思ってきました。というのは、生活面では、広島のひとつとすべてにすっかり慣れていて親しみを覚えるようになってきているからです。その思いのせいか、余計に日本という国のあり方についていろいろと注文をつけたいぐらいになってしまいます。もちろん、私には、日本のことにあれこれ口を出す権力も資格もないことが十分に承知しております。

3年の間に、成果らしい成果こそあげませんでしたが、個人的には、やはりたくさんのお話を学ばせていただいたと思っています。この約3年の間に、激動の世界という表現に象徴されるように、世界中、歴史的な出来事がたくさんありました。私の収穫のうち、多くはそれらの出来事を通じて得たものです。その激動の中で、時折痛感したことがあります。それは別ではなく、日本という国にどこか物足りないところがあるのではないかという思いです。ここで、自分の思いをこめて、あえて1、2を指摘させていただきたいと思います。

まず第1に、日本という国には自分らしさが必要なのではないかということです。もちろん、日本には、日本らしいものは数え切れないほど数多くあります。私の言いたいのは、国際関係における日本らしさです。

少なくとも、これまでの私の経験では、いざ世界になにか重大な出来事が起こった時、日本政府による明確な意志表示がなされるのはきわ

めてまれなことでした。賛成か反対か、支援か制裁かについては、はっきりしないか、またはほかの国が意志表示を行ってからそのあとを追従する形で決まるのは、日本の行動パターンのようなのです。1つの主権国家として、明確な意志表示ができないのは、とりもなおさずその国の国民にとっては、悲しむべきことであるといわざるをえない。国際関係では、明確な意志表示をせずに、他の国々とうまく付き合い、信頼関係を築き上げるとはとても考えられない。国際関係では、一国の明確な意志表示は、他国に理解される前提でしょう。国際関係は、人と人との付き合いと同じです。人間関係では、自分の思うことを相手に打ち明けないと、相互理解さえできず、信頼関係も、とうてい期待できないでしょう。その意味で国際化を目標にする国にとっては、明確な意志表示はまず不可欠であると言ってもよい。なぜならば、国際化は国際理解なくして成り立たないものであるからです。また、明確な意志表示は自分らしさのあらわれでもあります。それこそ永久の魅力です。魅力のない国は国際化になりがたいものです。マネーだけでは、世界の人びとのあこがれではない。もちろん、日本には、日本の弱い立場があるだろうと思います。多くの場合、他国に頼らざるを得ないのも事実です。とはいえ、はっきりした意志表示は決してマイナスになるとは思わない。私はずるさより正直さが世界の国々や人びとに受けられると信じています。真の友人を得るために、日本はもっと正直にならなければなりません。また、もっと魅力のある国になるために、明確な意志表示の能力は日本に求められるべきです。国際関係では、何かあった時に、日本国民の意志を代表

できる政府の見解をはっきり世界の人びとに示してほしいものです。日本らしさを感じさせる日本であってほしいものです。

第2に、日本という国には、真の平和が必要であることです。こういって、誤解されるかもしれませんが、これは決しておおげさではない。日本は平和憲法を持っているのが確かですが近年になってから少なからぬ事実は日本は、平和国家から遠のいていくことを、世界の人びとに教えています。ハードの面では世界が軍縮に向かっていくのに反して、国防予算が日増しに増加していること、専守防衛であるはずの自衛隊が海外に派遣される可能性が出てきたことなどがその有力な証明です。これらの動きは、世界の人びと、特にアジア近隣諸国に警戒の目を光らせて、平和理念を掲げる日本に対する不信感を招くことばかりになっています。その意味で、日本の行動はアジア及び世界に新たな不安定要因を作り出しているといっても過言ではない。日本の経済発展も、かつて平和憲法の理念に恵まれてきたのです。真の平和を求めるならば、口先や紙上にどめるだけでなく、行動をもって世界に示すべきであって、したがって、国防予算を増加して、自分の約束ごとを破るのではなく、平和憲法の遵守に努めるべきでしょう。

ソフトの面では、日本政府や日本国民は、平和の旗を高々に掲げている反面、80年代後半に入ってから、日本の有力政治家や閣僚たちが幾度にわたって、それと裏腹に過去の侵略の事実を歪曲したり、礼賛したりすることは記憶にまだ新しいです。歴史に直面視さしたくないのに、深く反省しているというのは、世界の人びとに信じられがたいでしょう。むしろ、それは日本国民の意志を代表するものではないし、一部の者の意見に過ぎない。しかし、かつて、多大な被害を受けた国々の人たちは、どんなつらい心境でそれを受け止めているでしょう。それは、日本人には理解も想像もつかないところです。こんな背景の下で、いかなる平和への努力も認められがたいものになってしまうのです。重要なのは、先般の歴史は、仮

に日本人にまれに知られていてもまたは忘れられかけていても、世界の人びとにまだ忘れられてはいないことです。むしろ日本人の言行によって記憶はしきりに新たにされている。

かつて被爆を受けた広島市民にとっては、平和というものはなによりも大切でしょう。広島への平和への希求は真剣そのものであるかもしれない。しかし、私は原爆資料館に立ったとき、言葉でいい表せないほど複雑な気持ちで胸いっぱいでした。広島（日本）は、戦争で被害を受けたからと言って、平和を求めようと思うだけなら、なお不十分です。戦争でもっと酷い目に合わされたのは、広島（日本）ではなく、ほかの侵略された国々です。なぜか原爆資料館に立って、平和に関する様々な議論を思い出しながら、そんな思いをしたのです。原爆記念碑の碑文を読んだ時、涙を流しました。平和こそ人類の求めるべき宝ものですと確信を深めた。日本の人びとにそんな信念を永遠に持ってほしい。

皮肉のことに、同じくこの平和都市といわれてきた広島では、戦争をたたえる戦勝記念碑が市内のある小学校に立てられていることが先ごろ聞かされました。これもまたとまどいを感じさせられました。日本は本当に平和に向いているのかという疑問は心の奥にどうしても消えていかない。私の理解では、平和とはそうしないことから得たものではなく、そうすることは絶対間違いであるという思いから初めて得られるものです。それは心の奥に根づいている信念ほかならない。

日本の本当の心を世界に理解してもらうために、これまでの日本の歩みをもう一度考えなおす必要がある。日本国民に平和の真義を見なおしてほしいです。そのために歴史への正しい認識と反省は欠くことができない。日本が真の平和国家であり続けてほしいです。平和日本であってはいじめて、世界に貢献する日本となりうるのです。

*注：広島市安佐南区の八木小学校の校舎に「征清記念碑」が立ててある。最近、ちょっと話題になっている。